

RelBib

Bibliography of the Study of Religion

<https://relbib.de>

Dear reader,

This is a self-archived version of the following article:

Author: Dehn, Ulrich
Title: “Naze monogatari no shingaku o motomeru no ka? (Warum wollen wir eine Theologie der Geschichten?)“
Published in: Fukuin to sekai (Evangelium und Welt).
Tōkyō: Shinkyō Shuppansha; 東京: 新教出版社
Volume: 45 (8)
Year: 1990
Pages: 50 – 52

The article is used with permission of [新教出版社](#).

Thank you for supporting Green Open Access.

Your RelBib team

EBERHARD KARLS
UNIVERSITÄT
TÜBINGEN



UNIVERSITÄTSBIBLIOTHEK

なぜ「物語の神学」を求めめるのか

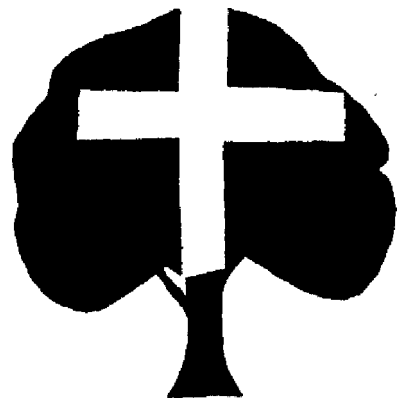
ウルリッヒ・デーソ

一九九〇年三月末、京都の関西セミナーハウスで開かれた、宋泉盛(C. S. Song)氏を囲む「日本の生きた民衆物語の神学」会議をきっかけに、西洋人の私の視点で、「物語の神学」とは何かを考えてみたい。

京都で聞かせて頂いたのは、宋泉盛先生の基調講演、さらに「中谷さんの物語」(中谷裁判)(鈴木正三氏)、被差別部落の状況(五十嵐照美さん)、在日韓国人の差別状態(徐貞順牧師)であった。その話しがなされた背景には、われわれのキリスト教の神学は概念、抽象的な教義から離れて、苦しみの中に生きている人間の現実的な「物語」に戻らないと、もう意味がない、という発想である。それに基づいて、宋泉盛先生を囲む会議を行なうのは三回目になっている。特に宋氏の「Tell Us Our

Names」(一九八四)という本を参考にすれば、「物語の神学」の優れている点が明らかになる。また、中国の民話を取り上げた「The Tears of Lady Meng」(一九八二)という本では鋭く人権侵害の問題を扱っている。それを含めて、四冊の本が部分的に日本語に翻訳されたのが、『民話の神学』(新教出版社)である。

先ほどふれたように、宋氏の講演を聞いて、それを議論した上で、日本における苦しみのいくつかの現場の話し(「物語」)を聞いて、参加者はそれぞれ感動したようだ。しかし、現場の人間の物語が耳に届いた上で、われわれの神学はどうなるかということは、ほとんど話題にならなかったと、私は感じている。私は何を感じていたのか、そして何を意図しているのか、



もう少し詳しく説明をさせて頂きたい。

宋泉盛氏の方法は、民話や神話を見出し、それを語って、その話しを神学的に分析する、および自分の言いたいことを補足するために、イラストレートするように説明する、という風に努めておられる。例を上げて見ると、「涙の水たまりの中のアリス」(『民話の神学』八七〜一二二頁「裏返しのエキュメニカル運動」)という話の中の、アリスの嵐に対する一方向的な会話を分析する。アリスは嵐に英語、フランス語で話かけて、猫の話もしてしまふ。ただ、嵐はその「会話」の相手にならない。

最後に、嵐は自分の感じていることを言うためにアリスを「岸」に連れて行こうとする。アリスの会話の方法のように、西洋(欧米)の教会は第三世界に対して宣教活動を行なった。すなわち、相手の声を聞かず、相手の状況も調べず、相手の気持ちも分からずに自分のキリスト教のあり方を伝道し、広げようとし、相手にそのまま従わせようとした。単純に言えば、宋氏のその物語の取り上げ方は、既に言いたいメッセージ、発想があつて、それを支える物語を選択して、語って、分析する、という方法であろう。「物語」は昔話、民話、神話、文学的な書物でもいいのである。

京都での「物語神学」会議の発展を考えて見ると、背景になる方法がそれとは違うのではないかと思う。この会議の中心になったのは(本誌に載ったように)、日本社会で虐げられている民衆、苦しんでいる人間、被差別の少数者の人々の話であつた。その流れの中で、宋氏の発表や思想が、どちらかと言う

と、前提の方法論になつていと言えよう。その方法が京都でのセミナーで利用されたかどうか、あるいは利用されるはずであつたかどうか、私はこの場で判断をしたくない。

会議の最後のセッションの時、私は「会議の感想」として次のように感じ、発言した。「苦しんでいる人間の物語を聞き、感動するだけで終わるのはどうか。われわれの課題はこれからこそなのではないか。その物語を解釈して、分析してみても、自分の物にする、つまり物語を扱うのは大事なのではないか。物語を扱う場合、目的を持つことは大切ではないか。「解放の神学」の方法がそうである。物語を取り上げる場合、その中心になつている人間の解放を求めて、必ず社会分析も神学の中心にしている、というような事を述べた。すると、誤解もされた、「ドイツ的」だ、とも言われた。(ところで、ドイツにはこういう風に考えている人がもう少しいると、有難い)。「物語」は方法ではない。物語そのものは目的である、と言われた。その点では、同意したくても、同意できない。むしろ段々分からなくなつてしまふ。また、「君は、方法と目的の区別を付けるな」とも言われた。私は「神学の構造」のために「方法」と「目的」の区別を付けるつもりはない。一体、神学を何のためにやるのか、という疑問を持ちながら、京都で感想を述べたのである。

伝統的な神学がつまらなくなつたからといって、今度、「物語」を中心にしよう、その方が面白くて、楽しくて、聞きやすく、感動しやすく、と言うことであろう。そうなら、日本社会で虐げられた者の物語を聞かせてもらうのは、ただの中流

階級の神学者の新しい楽しみになってしまおうのではないか。これは民衆の苦しみをただの「神学の材料」にしたこと、民衆を新しい中流の神学のために使ったことになってしまおうのではないか。これは言うまでもなく、皮肉であり、京都の会議にいられた方々は本格的な志を持っていた、というのは確かだろう。しかし、このように解釈される危険もあるのではないか。

比較になる例を上げてみよう、イエスは必ずたとえを使って、それを早速解説をして下さる。それに、たとえの中にその現実を越え、説明の部分がでて来る。または、晩餐の話（ルカによる福音書二二・七一―二三）では、イエスはパンを取り、感謝し、使徒たちに与えて、言われた。「これは、あなたがたのために与えられるわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい」。食事を終えてから、杯も同じように言われた。「この杯は、あなたがたのために流される、わたしの血による新しい契約である」（二二・一九―二〇）。すなわち、イエスの解説の言葉によって、パンと杯を与えることは意味あるものになった。ただの最後のイエスと使徒たちとの食事であったとしたら、もう人間の記憶には残っているはずはない。それは「概念」になる、ということではなくて、それは解釈の必要性に従うことである、と私は思っている。（私は新約聖書学者ではないので、ここに議論の余地があるかもしれない。）これは一つの強調したいことである。

もう一つは、「目的」の話だ。「物語」そのものが目的であれば、苦しんでいる人々の物語を参考にするだけで、また自分の

物語を語るだけで終われば、どういうことになるだろうか。宋泉盛氏の言葉を借りると、これは神学を「概念」の段階から物語の段階にだけではなく、イメージ、そしてシンボルの段階にも戻すことにならないのではないか。「民衆の解放」の道具になるだろうか。そうでもないだろう。「神学の解放」にもならないだろうか。一〇年前に、ヨーロッパでは、社会分析を神学の一部にすべきだという声が強かった。さらに、社会分析ばかりでなく、運動(action)も必要だと付け加えられた。エキメニカル運動の中にこのような考えは doing theology という概念として既にあつた。確かに京都の会議に基づく行動(会議等)が望ましいだろう。今回の段階で『日本の生きた民衆物語』を見付けたかもしれないが、『……の神学』になりうるとすれば、もう少しの作業が必要であるだろう。

この幾つかの指摘は厳しい批判に聞こえるかもしれないが、批判と言うよりも、むしろ私の頭の中になかなか整理できないことである。しかも、ここに述べた幾つかの質問に対する答えも、もう既に私の頭に置いてあるように聞こえるかもしれないが、そうでもない。ひょっとすると、私は京都の会議の話がほとんど分らなかったのだろうか。それとも、東西の文化、また考え方の相違が私の解釈にいたずらをしたのだろうか。いずれにしても、日本の方々と一緒に「物語の神学」のために戦いたいと思っている。そういうつもりで、黙っているより、私の言いたいことをここで説明した方がいいのではないか、と思った。

(富坂キリスト教センター主事)